

稽古に稽古を重ねる結果、争いから離れる

天真正伝香取神道流神武館館長 大竹利典先生

千葉県成田市の近く香取の地に大竹先生という方がおられ、香取神道流（※）を伝えていると聞いて、ヤン・カレンバツハとともにその道場『神武館』を訪れた。ヤンが言い出したことであるが、面識はまったくなかった。

突然の訪問にもかかわらず、先生は気さくに武芸全般について説明してくださった。

そのうちにすつと立ち上がり、隣の部屋から刀を取り出してズボンのベルトに差すや、いきなり抜刀の型を示された。そのあまりの速さに驚き息を呑んだ。刀の帽子が鴨居すれすれに通る紫電一閃、一気に振りおろされる。同時に体の捌きは納刀に入っただけ、しかも次にいつでも抜刀できる気と体があり、一触即発の感があった。事があれば逸機することは有り得ないという気迫で、正に一挙一動の動きであった。姿勢を低くした状態から刀



大竹利典先生の道場前にて(1988年)

を抜き出すというのも、居合とは違っていた。

「体を低くするのは、家の中の戦いを想定していますから。刀を振り回すと鴨居や障子の棧にあたり、刀が抜けなくなります。ですから低い姿勢で一氣にいきます」

自然の流れのままに型を進めるのは非常に困難なことだが、大竹先生ほどの方であれば当然のことなのだろう。「刀は体の延長」だという。鍛錬を重ねれば、やがて刀が自分の体の一部のようになる。

さらにひたすら稽古に稽古を積んでゆくと争いから離れ、ついには相手を斬らずともすむ境地に至る、とも言われた。

その夜、自分でも刀を抜いて練習してみたが、とても真似できるものではなかった。何本試みようとしたの一本すらできず、ひたすら感心するばかりでその日を終えた。

日々の生活はつい単調に流れがちで、時折、強いインパクトが必要となる。それは書物から受ける場合もあるが、ことに人との出会いで得られる影響は大きい。実感がともなえば何物にも代え難い特別な財産となつて、稽古の励みともなり、はつきりした目標も生れてくる。大竹先生との出会いは、まさにそれであった。



ロッテルダムで行われた「日蘭通商375年記念・日本祭」で演武する大竹先生(右)



甲冑姿の大竹先生(右)、旗持ちを務めたカレンバッハ氏(左)

大竹利典(おたけとしのり) 天真正伝香取神道流神武館館長。同流筆頭師範として国内外にて指導・普及に務める。一九八四年(昭和五十九年)、日本、オランダ「日蘭通商三七五年記念」に招かれ、ロッテルダムにて演武講演を行う。ちなみに初めて指導した外国人弟子がアメリカから来日したドン・ドレーガー氏。本格的に日本武道を修業し、海外に積極的に紹介した最初の外国人であり、ヤン・カレンバッハ氏をはじめ多くの外国人武道家がこの縁に繋がる。

※天真正伝香取神道流(てんしんしょうでんかとりしんとうりゅう) 流祖は飯篠長威斎家直(いいざさちやういさいいえなお)(一三八七年〜没年不詳)。下総国(千葉県)飯篠村に生れ、幼少より武芸に優れていた。主家滅亡後隠棲し修行、香取神宮にて神示を受け同流を開く。内容は剣術、居合術、棒術、柔術など武芸全般に渡り、さらに兵法、陰陽道などの学問も含む総合的体系を有する。流祖の教えは「兵法は平法なり」。活人円剣を悟り、人の道を全すること。具体的な特徴としては、敵が甲冑をつけていることを想定している点で、その隙間を攻撃するところに独特の型がみられる。同流から発する門流としては、新陰流、鹿島新当流、神道夢想流、宝蔵院流(槍術)などがあり、他にも有名な門流が歴史に名を連ねている。入門者は現在も血判をもって許される。参考文献『天真正伝香取神道流記念誌』(流祖飯篠長威斎家直公生

誕六百年を記念して



大竹利典先生、抜刀の蹲踞